

第359回山口西田読書会（2024年10月12日開催分）のプロトコル

大藤 渉

1. テキスト：「場所」「五」の第4段落302頁5行目から304頁の11行目まで

2. キーワードないしキーセンテンス

「理論理性の自省である認識論は単に判断意識の自省ではなく、知識自身の自省でなければならない、之を単に形式的なる判断意識に限ろうとするのは die blosse dogmatische Beschränkung der Erkenntnistheorie ではないか。」(304, 8-11)

3. 考察及び問い

西田は、リッケルトに対して、「リッケルトの認識論は唯、知識の構成原理としての判断意識を明にするに止まる」と批判する。しかし、西田によれば、認識論は「知識自身の自省」（知ることを知る）でなければならない。ここでいわれる「知ることを知る」の「知る」は、「単に形式的なる判断意識」とどのように異なるのか。また、「知識自身の自省」と言うときには、「知識自身の自省」を知る立場に身をおいているように思われるが、いかにしてこの立場は成立するのか。